

3. 片頭痛および周期性嘔吐症に対して第一世代抗ヒスタミン薬が有用であった7例

(東京女子医科大学小児科) 中務秀嗣・
伊藤 康・竹下暁子・
平澤恭子・小国弘量・永田 智

〔はじめに〕片頭痛および片頭痛に関連する周期性症候群に対し、第一世代抗ヒスタミン薬が有用であった小児7例を経験したので報告する。〔症例〕片頭痛の6例は7~14歳の学童(男3, 女3名)で, 3例は予防薬, 5例は急性期治療薬として cyproheptadine あるいは d-chlorpheniramine の内服や hydroxyzine の点滴静注を行い, 全例で症状改善を認めた。眠気以外に副作用は認めなかった。周期性嘔吐症の1例は中等度知的障害の21歳女性で, 10歳より嘔吐を反復し, 21歳時の嘔吐発作時に hydroxyzine の点滴静注が奏功し, 以降予防内服が有効であった。〔考察〕小児の片頭痛では, 保険適応や副作用の面で使用薬剤が制限される。第一世代抗ヒスタミン薬は小児への投与経験が多く, 抗セロトニン作用による脳血管の収縮抑制が片頭痛の予防に有効とされる。自験例では, 眠気以外に副作用もなく, 急性期治療薬としても有効であった。〔結論〕第一世代抗ヒスタミン薬は, 有効性および安全性から, 小児の片頭痛および片頭痛関連周期性症候群の治療に有用と考えた。

4. Turbo spin-echo 法による拡散強調画像が診断に有用であった感染を伴った皮膚洞の1例

(東京女子医科大学病院¹画像診断・核医学科,
²脳神経外科) 阿部香代子¹・鈴木一史¹・
藍原康雄²・川俣貴一²・坂井修二¹

症例は1歳3カ月男児。1歳2カ月時, 腰背部の皮膚隆起部の発赤排膿, 38度台の発熱を生じ, 近医入院にて抗生剤治療を開始された。腰仙椎MRIで皮膚洞の感染, 脊髓腔内に膿瘍または腫瘍形成を疑われ, 精査加療目的に当院脳神経外科へ転院となった。当院MRIにて, 脊柱管内にT1WIで等信号, T2WIで高信号を示す多数の腫瘍様病変を認め, これらは Turbo spin-echo 法による拡散強調画像(TSE-DWI)にて高信号, ADC mapにて等信号を示した。画像上, 膿瘍形成は否定的, 類上皮腫を疑ったが, 脂肪の存在を疑う領域もあり類表皮嚢腫の可能性も考えられた。手術にて膿瘍形成はなく, 腫瘍様病変は類表皮嚢腫であった。TSE-DWIは, 従来の撮影法に比較し磁化率アーチファクトが少なく, 病変の内部性状だけではなく詳細な位置関係の把握もでき, 小児脊椎領域の病変の診断能の向上に寄与する新しい撮影法として期待できる。